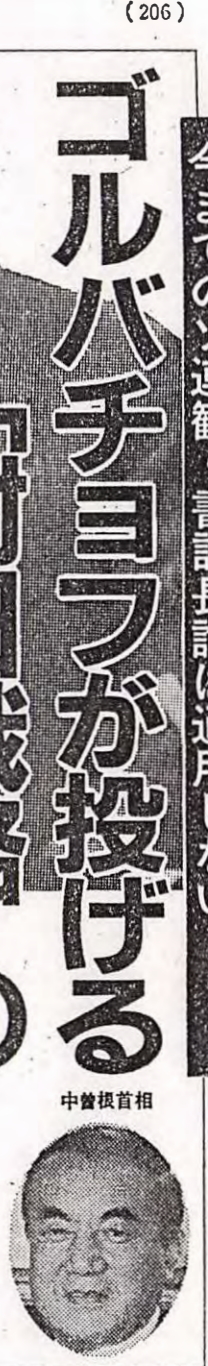
『現代』1986年12月号

今までのソ連観・書記長論は通用しない

ゴルバチョフが投げる「対日戦略」の不気味な変化球

「領土」も「経済」も日本外交は待ったなし。レイキャビク決裂後、日本の新聞がまったく気づいていない〝赤いケネディ〟の正体と果敢な現実主義



中曽根首相

中嶋嶺雄（なかじまみねお）
（東京外国語大教授）

米ソ会談報道に問題あり！

去る十月十一、十二日の両日、全世界の注視のなかで行われたレイキャビク米ソ首脳会談は、二日目の第四回会談でSDI（戦略防衛構想）をめぐって正面衝突し、物別れに終わったとの報道が十月十三日夕刊各紙でセンセーショナルに伝えられました。

その日の朝刊各紙は、今回の米ソ会談がきわめて順調に推移し、まさにハッピー・エンドになるだろうと報じていただけに、読者は狐につままれたような感じだったと思います。

一方、米ソ両首脳がそれぞれ帰朝して、国内向けの演説を行ったあと、次第に明らかになってきたことは、SDIをめぐる土壇場での決裂にもかかわらず、戦略核や中距離核戦力（INF）の問題では、双方がほぼ合意に達したばかりか、お互いにホンネをぶつけあったことの成果も大きく、今後の米ソ本格会談への期待がもてそうな状況もあるというものでした。

こうなると、わが国のマスコミは、一方的に過剰な期待をいだいていて、その期待がはずれたために大騒ぎをしたということになるわけで、国際政治に対する認識の浅さをまたもや露呈したといわざるを得ないでしょう。そもそも、今日の国際情勢や米ソ関係、とくに米ソの軍事バランスの問題は、短時日の首脳会談ですべてがかたづくほど単純ではないし、一夜にして米ソの軍縮が実現するなどというわけにはいかないのです。ましてやSDI問題が議論されないうちに楽観的な見通しを報ずることなど禁物だったのですから、日本の新聞報道は、この点で大いに問題があったといわざるを得ません。

同時に、今日の国際情勢や米ソ関係、アメリカ、ソ連の国内事情を見れば、米ソは決定的に対決しつづけるわけにもゆかないことが理解できるはずで、レイキャビク会談の物別れが、ただちに米ソ冷戦の再開につながるかのように見るのも危険な短絡だと思います。

ところで、一部の早とちりの新聞論調は、米ソ会談の決裂によってゴルバチョフ書記長の訪日も遠のいたかのように書いていましたが、この点も逆で、米ソ関係が一時頓挫しただけに、ソ連としては、今後、中国や日本への外交的な働きかけをより一層強化してくると思います。日本に対しては、ソ連の最高指導者訪日という舞台を設定したうえで、積極的な外交攻勢に出てくるのではないかと私は見ています。

ソ連の弱点さらした演説

ここでは、そのような前提に立ってゴルバチョフの対日戦略を分析してみたいと思います。この場合に重要な手がかりは、去る七月二十八日のウラジオストクにおけるゴルバチョフ演説です。私の率直な感想を言えば非常に画期的な演説だったと思います。それは大きく分けて二つの理由からです。

一つは、ソ連の最高指導者が自己の体制の脆弱性をかなりさらけ出して、このまま無駄に時間を費やしていったらソ連に未来はないんだと言わんばかりに、ソ連極東部やシベリアの開発と国内経済改革の重要性を強調したことです。しかもそれは、モスクワではなくて、ウラジオストクという極東ソ連の最も重要な拠点都市、シベリア開発を含むソ連の経済の活性化にとって非常に重要な場所で、アジア・太平洋地域に向かって演説していることです。

日本の新聞ではウラジオストク演説の後半部分、つまり国際関係の面だけが要約されていましたけれども、実は前半部分はすべてソ連の国内改革について述べ、とくにソ連極東本部の開発の重要性を七項目に分けて具体的に指摘しています。たとえば、ソ連極東部の地勢学的な位置とか重要性を前提にして、海洋開発の立ち遅れ、レア・メタルを含む鉱業の促進、燃料とエネルギーの適正配分の問題、インフラストラクチュアが非常に立ち遅れているという問題、地域的な科学技術政策が

まったくないという問題、そのことがひいてはソ連の経済の活性化を妨げ、輸出能力をスポイルしてしまっているという問題、それに資金不足という点を明白に指摘して、この点の改善の緊急性から説きおこしています。

つまり、この演説は単に、米ソ首脳会談を迎えるための宣伝とか外交攻勢ではないのです。ソ連自身の内政上の改革志向を前提にした演説であるにもかかわらず、日本ではこの点がほとんど報道されていないのです。

日本の経済外交に注目して

もう一つは、ゴルバチョフ演説が「ニュー・アプローチ」による「現実主義」（リアリズム）を非常に強調している点でしょう。従来、ソ連の指導者はイデオロギーを強調し、マルクス・レーニン主義、特にレーニンの原則を強調していたわけで、どれもこれもつまらないお説教調の演説だった。ところが今回は、じつに具体的な事実に触れています。

たとえばアフガニスタンからの撤兵問題にしても、十二万人と推定されるソ連軍の約一割に当たる六個連隊とはいえ、今年中にアフガニスタンからの撤兵を始めるということを約束している。それはレイキャビク会談の決裂にもかかわらず、この十月十五日から本当に開始された。中ソ関係の改善についても、中国側が「三大障害」といっているもの、つまり、

①中ソ国境駐留ソ連軍の大幅削減およびモンゴルからのソ連軍撤退
②アフガニスタンからのソ連軍撤退
③カンボジア侵攻のベトナムに対する支援停止

これらの問題に全部触れ、特にモンゴルの問題には、モンゴル駐留ソ連軍のかなりの部分の撤兵をモンゴル政府と検討中だと具体的に述べている。

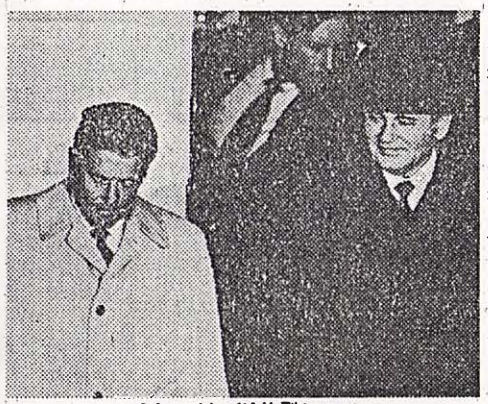
ソ連の最高指導者が近い将来の自己の行動計画を、公開の場でこれほど一方的に発言したことは、いままでなかったでしょう。その文脈のなかから日ソ関係も出てくる。特に経済が非常に重要で、国際関係の形成は経済を主導とする、ということを日本との関係において言っています。

「日本の国民は、経済外交と言われるものによって、よりダイナミックな対外関係を形成する特殊な方法を持っているようだ。これをソ日関係にも当てはめようではないか」

とゴルバチョフは言っている。

従来のように日米安保体制や日本の〝軍国主義〟を批判したり、あるいはアメリカや中国と一緒になって反ソ戦略を組もうとしているという対日批判の演説ではなくて、ソ連経済の活性化にとって日本のように経済でやっていく国のあり方がきわめて重要である、ということを強調しているわけです。

ソ連自身の経済の停滞、特に科学技術の立ち遅れに対する悩み、軍事力だけでやってきたブレジネフ時代のコスト高に対する悩み、フルシチョフからブレジネフに至るまでの政策がもたらした、ソ連の世界戦略によるさまざまな紛争とその弊害、そこからきっぱりと足を洗って、「ニュー・アプローチ」で新しいソ連の国際環境を形成したいという意識が、ゴルバチョフ演説からありありと窺えるわけです。



レイキャビクでは決裂したが……

〝赤いケネディ〟的部分

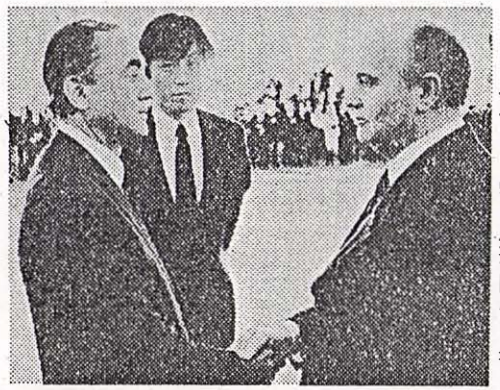
なぜこのような画期的な演説ができるようになったのか、それは二つあると思います。一つはゴルバチョフ自身の哲学というか考え方。もう一つはゴルバチョフ体制の権力基盤、ゴルバチョフ自身の政治的リーダーシップの問題があると思います。

フランスの著名な社会評論家の亡きレイモン・アロンが『平和と戦争』という有名な著書の中で書いているように、社会主義・共産主義の国を分析するときには、その指導者の哲学とか体制のシステムの特徴をつかまない限り、内在的な分析はできないわけです。ソ連や中国の分析は、西側諸国と違い、指導者の考え方とか指導者の権力基盤がどういう形で成り立っているかということが決定的に重要だと思います。

ゴルバチョフが登場して約一年半、その間にゴルバチョフがやろうとしてきた政治を見ると、従来のソ連社会の型を破るような、彼の言葉でいえば「ニュー・アプローチ」を前面に出してきた。「ニュー」というのはアメリカの大統領がいつも使う言葉ですが、ソ連の指導者もこういう言葉を使い始めた。従来のソ連の指導者は伝統を継承するタイプだっただけに、ここにも彼自身の新しい体質がある。これはゴルバチョフ自身が五十四歳という若さでソ連の最高指導者になったということが決定的に重要で、まさに〝赤いケネディ〟といわれるゆえんでしょう。

ゴルバチョフはモスクワ大学法学部出身のエリート党官僚でありながら、ロシア共和国最南端のコーカサスに近い郷里スタブローポリのコムソモールで活躍し、やがてソ連にとってネックであった農業問題を手がけてきたのに、従来のジンクスを破って昇進したというかなりしたたかな人物ですが、みずからの体制の弱さを知りつくしているわけで、だからこそ抜本的な改革をしなければならないという哲学を持っているのではないかと思います。小さなことでいえば、例の節酒令の導入

品質を誇る
広島の酒
亀齢
キレイ



中曽根首相とも握手したことが（1985年3月14日）

で、ソ連はアメリカと対立していながら、伝統的・体質的に二極指向が強いんですね。米ソですべて解決しようという考え方が強い。ことにグロムイコ外交はそうだったと思います。このような米ソだけでものごとを解決しようという考え方から、ヨーロッパとかアジア・太平洋地域、特に日本とか中国が重要だという考え方に変わりつつある兆候が窺えるわけです。つまり多極型の認識へ転換してきている。

これもソ連の指導者としてはめずらしいことで、レーニン以来ソ連は、常に資本主義と二つ並んでいて、最後には自分の社会主義が勝利するという牢固とした哲学を持っていた。ところがゴルバチョフは、アメリカとソ連以外の世界があり得るということを、かなり認識していると思うんです。

私はこうした立場を一種の「グローバリズム」だと見ていますが、ゴルバチョフは新しいグローバリズムの立場から、地球全体を視野に入れた外交政策をやろうとしているのではないか、という気がします。

彼のブレーンにA・ヤコブレフという人物がいます。ソ連科学アカデミーの中で非常に重要な世界経済・国際関係研究所（IMEMO）前所長で、現在はソ連共産党の宣伝部長としてクレムリンの書記になっている人ですが、このヤコブレフの著書に『危機の瀬戸際に立ちて――トルーマンからレーガンまで・核時代の教義と現実――』というのがあります。この本は、私も綿密に検討してみましたが非常に面白い。ヤコブレフは強硬な反米主義者である半面、いわば親日派で、日本に対する評価が非常に高いんです。その彼がゴルバチョフに登用されて、党の宣伝部長になりクレムリン入りしたということは大きな意味を持つわけで、彼の影響は無視できないと思います。

また、経済面でも、ノボシビルスク経済・工業生産組織研究所長のアガンベギャン科学アカデミー会員をモスクワに呼んで、かなり大胆な経済改革をやろうとしている。このようにしてゴルバチョフはブレーントラスト（頭脳集団）をつくっているわけです。

米ソ関係では、アメリカ・カナダ研究所長であるG・アルバートフとか、極東研究所にいたE・プリマコフ（彼はヤコブレフの後任として世界経済・国際関係研究所長に任命された）など、周囲に学者をかなり登用してブレーン政治をやっています。これもいままでのソ連の政治にはない新しいスタイルです。

古い指導者の発言を封じる

このように見てくると、ゴルバチョフ体制は基盤がかなり固まっていると私は思います。ロマノフ、グリシンなど、ブレジネフ時代から非常に高いポジションにいたクレムリンのライバルたちを引退させ、グロムイコのような長老も棚上げしてしまい、そのあと次次と新しい血液を導入してきた。これは今年二月に開かれた第二十七回党大会でも確認されたわけで、党大会に至るまでにクレムリンの大幅な入れ換えをして、ほぼゴルバチョフ体制で固めたと思います。

それの一つの試金石が、チェルノブイリ原発事故だったと思います。

事件そのものはソ連のイメージをかなり傷つけ、西側諸国のようにテキパキとした報道はしなかったし、死傷者の数もいろいろ憶測を呼んだけれども、事故報告書を国際原子力機関にソ連自身が率先して提出したり、ソ連としては従来ない早い対応をやっていると思います。ゴルバチョフのソ連がさかんに言っている「情報公開」（グラースノスチ）ということも、かなりやりはじめているわけですね。

実は公開性こそソ連にとっていままでタブーで、何でも隠そうとしていたわけですが、そのような体質そのものから訣別しなければいけないということを、ゴルバチョフ自身は知っているようです。ソ連にとっていちばんのガンである公開性を推進することによって、古い体質を持つクレムリンの指導者たちに再び発言力を持たせないようにする。これがゴルバチョフ政治の一つの狙いではないでしょうか。

軍事的脅威論は通用せず

従来のソ連のように、軍事力をチラつかせて、それだけでやってくるならば、日本やアメリカが防衛努力をして対抗する措置をとっていればよかった。しかし、軍事力だけでなく経済とか社会とか文化とか、多方面から多角的な外交戦略に出てくるとなると、いわばいろいろな変化球を投げてくるわけですから、その変化球に対応するような打撃練習を十分やって対策を立てておかざるを得ない。その意味ではまさ

酒は広島の亀齢（キレイ）うまさ爽快

に不気味な存在だという気がします。「ソ連は脅威だ」とだけ言っていればいい時代ではなくなってきている。具体的にいろいろな問題を提起して、向こうから呼びかけてくるわけでしょう。今度は向こうからも「日本に来たい」と言っているわけですね。来たいと言っている以上、日本だって受けざるを得ない。日本における従来のソ連論なりソ連観は、ソ連をきびしく見るあまり、ソ連を脅威の対象とだけ見なしてしまって、対抗的に反ソ主義を展開していればいいんだという問題の立て方が一方にあり、他方には、ソ連は誰が指導者になっても変わらない国だという固定観念があった。

しかし、ゴルバチョフになってから、ソ連は体質的にも明らかに変わってきていると思うんです。ウラジオストクの演説は、ソ連にとっても切羽詰まった状況の中で出てきているわけで、その意味でも、従来のソ連論なりソ連観を、日本側も修正していかざるを得ないと思いますね。

ソ連の〝油の傘〟も離反され

いままで述べてきたことを、別の角度からまとめますと、従来、ソ連は軍事力に対する過信があった。特にソ連の幹部、つまりクレムリン官僚はこの点で非常に保守的だった。これまでソ連はGNPの一四㌫前後を軍事費に投入し、一種の干渉主義でその世界戦略を維持してきたわけですね。ニカラグアとかアフリカ各地へ出て行ったり、アフガニスタンやインドシナ半島にも干渉してきたけれども、そのことによって、むしろ反ソ感情のほうが強まるぐらいで、あまり利益がない。

しかも軍事力のコストは膨大で、ソ連の兵士を一人国境の外に送ると、一日最低二百米ドルかかるといわれているわけですから、ソ連は年間百億米ドルから百数十億米ドルを、自己の世界戦略を維持するためだけに使っている。ソ連自身、肥大化した軍事力のコストに悩みつつあるわけです。

さらに、石油も枯渇し始めています。私は実際に行って調べてきたんですが、ガソリンの価格はソ連国内で一リットル四八カペイカ（百カペイカ＝一ドル＝二百四十円）と四倍になっています。公定相場で計算しても、日本のガソリンより高い。産油国はどこでも石油やガソリンは安いものなんだけれども、こんなに高い。

ソ連の国際戦略は、石油を東欧諸国などに供給してその支配権を維持していたわけで、インドなどの友好国に対してもそうです。インドとソ連とは準同盟国で、インドはソ連から石油を買っていたけれども、この春に私がインドへ講演旅行に行ったときに、たまたまその問題に当面して調べてみたら、ソ連の石油は当時一バレル三十数ドルなんです。いま石油は一バレル十数ドルといわれているわけですから、インドはソ連から石油を買うという契約があったにもかかわらず、スポット買いでアラブから石油を安く買っている。こうして準同

盟国さえもソ連の〝油の傘〟から離れていっている。

こう見てくると、ソ連が従来考えていた軍事力と石油を武器にするというパターンが、通用しなくなってきたと思います。そこへいくと、アジア・太平洋地域は経済がうまくいっている。特に日本がそうだ。南のあたたかい太平洋地域にあって、非常にうまくいっているように見える。

中ソ和解は当然の流れだ

つまり、ソ連は自己の世界戦略を再検討せざるを得なくなってきている。このことは言ってみれば、非ブレジネフ化を内政的に進めるだけではなくて、国際的にも進めていかなければならない。非ブレジネフ化を国際的に進めれば、中ソ関係も当然よくなる。中国のほうも非毛沢東化を進めているわけですから、中ソ関係が改善されていくのは当然なわけです。

しかも、中ソ関係の改善プロセスを見ていると、社会主義国が内輪ゲンカをしてお互いに競い合っている余裕はなくなってきているのではないかという気がします。ここに中ソ和解の今日的意味があるわけで、東西冷戦下で西側諸国にたいして一枚岩的団結だったといわれる一九五〇年代を見ると、中国もソ連も新しい社会主義世界体制の中でバラ色の可能性を持っていた。そして六〇年代はむしろそのような可能性を競い合ったがゆえに中ソは対立していくわけですね。しかし最近は、中国も経済改革をやっていますが、なかなか思うようにいかないし、中国も軍事費をたくさん使っていてそのコストに悩み、そこから転換しようとしている。

こうしてお互いに共通項があるならば相互依存をして相互補完の関係になっていくべきだという認識が出てきているわけで、その点は今度のゴルバチョフ演説にもはっきりと出ています。そうなると、中ソ関係が改善されるの

英国の伝統…ウィンザーノットがアルファンによって生まれ変わりました。
スピーディな着け外しと、ネクタイのスライドによる首回りの調節が、当社独自の開発により可能になりました。高級シルクに豊富な色柄…。絶妙な美しさが、ひときわ貴方の胸元を光らせます！
●価格　¥5,000～¥10,000
アルファン
（国内特許及び海外特許5カ国実用新案出願中）
株式会社アルプス・カワムラ
〒103 東京都中央区東日本橋3-10-15
TEL(03)663-0601㈹
●お求めはお近くの百貨店・専門店で。
お手持ちのネクタイをアルファンタイにいたします。
「白洋舎」全国1500軒の各店頭ならびに「アルプス・カワムラ」にてお取り扱い致しております。
●お問合せは
「白洋舎」ご相談コーナー ☎03-460-9011
または、「アルプス・カワムラ」広報 井上
☎03-663-0601(代)

秘蔵四百年。

天正の頃、東白川村大沢幡竜寺の住職が、宇治から持ち帰った茶の種子を育てたと伝えられています。奥美濃の盆地という独特の風土が、それから四百年をかけて〈白川茶〉を作り上げたのです。

〈朝霧の業—白川茶〉
美濃白川茶炭火仕上げ
地元白川の堅炭を使い、茶職人が丹精込めて仕上げました。手づくりならではの味わいです。

●白川茶詰合せ———5,000円
●三越本店・銀座店でお求めください。
自園自製・秘蔵の白川茶
ますぶち美濃白川茶㈱
産地工場：岐阜県加茂郡白川町黒川1400
TEL 05747(7)1245㈹
東京支店：東京都大田区南馬込5-24-10
TEL 03(776)9181㈹

は当然なんですね。

ただ、中ソ関係が改善されることによって、それが日本にとって脅威になるかという問題があるわけです。アメリカにとっては悪夢かもしれない。なぜならば、アメリカの戦後の一貫した政策は、中ソ離間策ですからね。アメリカは中ソ対立で救われてきたし、それを大いに利用もしてきた。

日本はアメリカよりもっと近い立場で中国やソ連と隣接しているわけですが、どうも見ていると、最近の中ソ和解は、そのことによって極東の軍事情勢が著しく日本やアメリカに不利になることはないのではないか。中ソは軍事力拡大の方向で歩み寄っているのではなくて、まさに百万近い兵力をお互いに寄せ合っているというところに問題があったわけです。

日中の「覇権条項」がネック

これを日ソ関係との関連で考えてみるとどうなるか。従来、日ソ関係というのは日中関係の裏側にあったわけです。日中が接近し、友好関係にあった反面、日ソ関係は悪くなった。これはつまり、好むと好まざるとにかかわらず、日本が中ソ対立に巻き込まれていたことになるわけです。

一九七八年に締結された日中平和友好条約の「覇権条項」にしてもそうです。当時中国はソ連を覇権主義と見なし、社会帝国主義と見なして、ソ連を不倶戴天の敵として位置づけていた。だから日本と中国は一緒になってソ連の脅威に対抗しよう、ということを中国はしきりに言っていたわけですね。

そのころ中国の指導者は、日本に来て対ソ対決上、「日本の防衛力を大いに増強してください。GNP比率二%でも四%でも結構です」とも言っていた。そういう中国の戦略の上に乗って、日本はソ連がいやがる「覇権条項」というものを入れて日中平和友好条約を締結した。この事実はソ連をもって、ソ連は日本が中国と一緒になって反ソ戦略をとったと受けとめた。そのことを口実にして、ソ連は極東軍事力を増強し、北方領土の軍事基地化をはかっていったわけです。

そういう背景があって、日ソ関係は実は中ソ対立に巻き込まれ、同時に日中友好関係の裏側に存在して、これまで関係が悪かったわけです。

ところが、そういう経過を十分に承知しているソ連が、国内経済をアジア・太平洋地域に大きな力点を注いで改革しようとしているときに、出口に存在する日ソ関係が非常に悪いんではダメだという認識を強く持ち始めたと思うんですね。

日本の受け入れ態勢は？

そうなってくると、日本としてもそうしたソ連の対日評価を受けて立たざるを得ない。言うまでもなく、ソ連の最高指導者である党書記長が来日するなんてことは歴史上初めてのことで、ツアーの時代にロシア皇帝が来日したこともないのですから、まさに有史以来の出来事です。いったいどんなことが起こるのか。相手はどういうシナリオをもって来るのか。北方領土問題についてどこまで話し合われるのか。いま日本国民は関心を持ち、同時に一抹

朝霧の業。

標高650m。奥飛騨に朝霧が立ちこめる。その中でじっくり熟成を待つ〈白川茶〉。——独特の苦味と、ふくよかな滋味があるのも、そうした飛騨盆地がもたらす風土の味わいなのです。

〈秘蔵四百年—白川茶〉
炭火焼のり
厳寒期の有明海で採れた初摘みの海苔を、備長炭で丹念に焼き上げた、風味豊かな逸品です。——

●白川茶・焼のり詰合せ—5,000円
●三越本店・銀座店でお求めください。
自園自製・秘蔵の白川茶
ますぶち美濃白川茶㈱
産地工場：岐阜県加茂郡白川町黒川1400
TEL 05747(7)1245㈹
東京支店：東京都大田区南馬込5-24-10
TEL 03(776)9181㈹

のすごく刺激したはずです。

ソ連というのは伝統的に保守的な体質を持った国で、しかも自分がやったことに対しては鈍感だけれども、他人にやられたことに対しては非常にセンシティブであるという、一種のコンプレックスを背から持っている国です。にもかかわらず、わが国は日中友好条約の中にソ連を覇権主義と規定したような条項を入れて、挑発的なことをしたわけです。外交上は「特定の第三国を指すものではない」という抜け道を設けたのですが、外交というのは、いわばパーセプションのゲームだから、相手がどう思うかが肝心なんであっ

の不安と期待を持っているわけです。

実は、日本の外務省は、こんなに早くソ連が対日攻勢に出てくるとは思っていなかったと思うんです。ゴルバチョフが「日本を訪問したい」なんて言うはずがないと思っていたに違いない。ところが、意外に展開が早い。

訪日のときは余裕たっぷり

昨秋のジュネーブでの米ソ首脳会談も急に開かれたのですが、今回のレイキャビク・ブレ首脳会談もそうで、ゴルバチョフのソ連はやることのテンポがかなり早くなってきている。いまの米ソ関係は、お互い対立しているようでいながら、基本的には共通の悩みを持っているわけです。アメリカはSDI（戦略防衛構想）をさかんに言ってますが、カネがかかり過ぎてどうしようもないし、国内にSDI反対の声もある。したがってレーガン大統領としても、米ソ首脳会談には応じざるを得ないという問題がある。

つい先日、米ソのスパイ事件がありました。五〇年代の冷戦時代に起こった「アルジャー・ヒス事件」（五〇年代初めに米外交官ヒスがソ連のスパイとして摘発され、〝米ソスパイ論争〟となった事件）と同じような事件で世界を驚かせましたが、この事件のときは本当に冷戦ですから、米ソ首脳会談などなかったし、このスパイ事件を契機に米ソは亀裂を深めていったわけです。ところが今回は、お互いに非難合戦をしながら、おさまるところはおさまっています。このことが米ソ関係全体に傷つけることがないようにという配慮が、相互にあるわけです。アメリカもソ連も大きな悩みを持っていて、話し合いのルートだけは何とかつけておきたい、ということですね。

一方、タルイジン・ソ連第一副首相が九月に中国を訪問していますが、中国は「三大障害」が完全に解消されるまで中ソ和解はあり得ないと言っているものの、それは西側に対するジェスチャーで、実際にはかなり和解に向かって進んでいるし、今後中ソ間では、国境横断的なプロジェクトがどんどん進んでいくと思います。場合によれば中国の労働者をシベリアに投入することもあり得るし、中国の鉄道建設や内陸部の開発にソ連が協力することも大いにあり得る。

そうすると、ソ連としては、一方で米ソのパイプがともかくもつながっていると同時に、いつもあげ足を取られた努力としての中国は存在しなくなっているわけです。ソ連は何をするにも中国に足を引っ張られて、中国を気にせざるを得なかったけれども、最近の中国はそうではない。ましてやSDIの問題では、鄧小平もソ連と同じ立場をとっているわけですからね。アメリカがSDIについて昨年来、中国にしきりに同意を求めていたのに、鄧小平ははっきりとSDI反対を表明しています。国際政治上これほど大問題になっているSDI問題で中国がアメリカの

側に立つかソ連の側に立つのかは、きわめて重大な意味をもっている。それだけに、中国の態度にソ連は大いに満足していますし、この点でも中ソは一致しつつある。そうなってくると、訪日のときのゴルバチョフは、かなりの余裕を持って来ることになる。

「北方領土」は新提案あるはず

そういうゴルバチョフを迎えるだけの用意が日本にあるかどうかが問題で、ゴルバチョフのウラジオストク演説に見合うだけの哲学を、中曽根さんがもっているかどうか。最近の対米失言にも見られるように大いに疑わしい。しかも日本政府・外務省が、ソ連の大きな変化と意図を汲み取った対ソ外交のシナリオをつくっているかどうかということになると、ほとんどまだできていないのではないかと思いますね。だから、来年一月あるいはそれ以降だとしても、ゴルバチョフ来日までの短い期間は日本外交にとっても非常に大事だと思います。

日ソ関係において、領土問題は避けて通ることができない問題ですが、ゴルバチョフはウラジオストク演説で、「世界における日ソ両国の客観的状況は、過去の諸問題にこだわることのない平穏な雰囲気のもとで、健全で現実主義的な基盤に基づく協力の深化を求めていく」

と言っています。これは二つの解釈が可能だと思います。領土問題は存在しないのだという従来のソ連の主張を貫いたものとも解釈できるし、後半に力点を置くと、「現実主義的な基盤」と言っているわけですから、領土問題は存在すると主張している日本の期待なり要望をも勘案して対応していく用意がある、というふうにも読めるわけです。したがって、いまのところは「玉虫色」です。

しかし、もしもゴルバチョフが日本に来て「領土問題は存在しないのだ」と言って席を蹴って、共同コミュニケも出さずに帰っていくという最悪のシナリオを想定した場合、それならゴルバチョフは何のために日本に来たのか、ということになる。ゴルバチョフはシベリア開発のために日本との経済協力を本当に必要としていると思うんです。それでいながら、将来の話し合いの余地も何ら残さず、ブレジネフ時代と同じように「領土問題は存在しない」と言って席を蹴って帰るために日本に来るだろうか。そんなバカなことをわざわざしにくるほどゴルバチョフは愚かではないと思いますね。

確かにいままで、ソ連の指導者は領土問題について期待を持たせるようなことは言っていません。ソロビヨフ・ソ連駐日大使はさる九月十七日、アジア調査会の講演で、ゴルバチョフの一月訪日の可能性を強調した上で、「ソ連は第二次大戦の結果の修正は容認できない」と言って領土問題については依然として従来のソ連の主張と同じようなことを言っています。

ライサ夫人はイメージ作戦に一役

しかし、これは一種の牽制というか、事前の戦術であって、いま駐日大使の口から「領土問題を話し合う可能性がある」などと最後の切り札を言ってしまったら、ゴルバチョフが訪日する意味がなくなるわけです。むずかしい、むずかしいと言っておきながら、ゴルバチョフが来たときに何かの可能性を日本に与えるのではないか。

そういうことになると、次の可能性を求めて日本の総理大臣が訪ソしなければならない。だいたい領土問題のような戦後に残された懸案は、向こうの首脳が来て解決していくなんてことはあり得ないわけです。日本は敗戦国ですから、次のステップとして日本の首相が向こうに行き、そこで初めて本質的解決があるわけです。

従って、ゴルバチョフ訪日をいちばん喜んでいるのはほかでもない中曽根さんでしょう。なぜなら、今度の訪日でゴルバチョフが中曽根さんを評価し、「この続きはモスクワで」なんてことになれば、「戦後の総決算は北方領土問題を中心とした日ソ関係の改善である」ということを言い出して、あと一年と区切られた任期が、さらに延命につながるかもしれないからです。

中曽根さんは最初アメリカに行ったとき、「日本は不沈空母なり」と言って、レーガンと一緒にソ連と対決する姿勢を表明しておきながら、今度はゴルバチョフさまさまというわけです。アメリカの新聞『ジャーナル・オブ・コマース』紙（一九八六年八月二十六日付）が「中曽根・ゴルバチョフ首脳会談くらい突飛なものが日本でほかにあるだろうか」と皮肉っているのは、当然だといえましょう。

いずれにせよ、まずゴルバチョフが日本へ来てボールを投げて、その変化球をどのように受け取って投げ返すかは、日本にまかせたまま帰るのではないか。

「北方解決」四つのシナリオ

ゴルバチョフがどんなボールを投げてくるか。領土問題に関する限り、全面返還か、さもなければ二島（歯舞、色丹）返還か、あるいは領有権は譲らないまでも、共同利用権とか共同開発権を与えて日本を誘い入れるか、いろいろなシナリオがあり得るわけです。

従来日本では、共産党も含めて、四島全面返還の立場で来た。また、一九五六年の日ソ共同宣言のときに「平和条約締結時に歯舞・色丹の二島だけは返す」ということをソ連が言った。それは確認されているわけです。

ただし、田中角栄首相が一九七三年に訪ソしたときに、「未解決の諸問題のなかに領土問題は含まれるのか」と念を押したところブレジネフが「ダー（そうだ）」と言ったということですが、その後ソ連は、領土問題は一切存在しないという立場をとり、「ダー」と言ったというのも公式記録がないわけです。当時の新関駐ソ大使と新井参事官らが、田中首相と一緒にそういうことを聞いているだけで、これでは日本は非常に弱い立場にあるわけです。

そういうことを勘案すると、従来の三つのシナリオ、つまり、

①全面返還
②二島返還
③領土問題は一切存在せず

以外にも、さまざまなヴァリエーションがあり得ると思います。さきに述べたように、ウラジオストクのゴルバチョフ演説の「過去の問題にとらわれない現実主義的な対応」ということからいえば、領土権についてはペンディングにする、あるいは、譲らないけれども共同利用とか共同開発とか、そういうことを含めた変化球があり得ると思うんです。これが第四のシナリオですね。

あるいは、わが国でも一部で言われているように外貨不足のソ連事情を考えれば二島ないしは四島の買い取りということだって、まったく突飛なことはいえないでしょう。歴史的にもアメリカがアラスカを買った例がありますが、領土問題を国家間の紛争や戦争にうったえるのではなく、売買で解決するという方法はひょっとすると将来の人類の知恵になるかもしれません。

さて、領土問題についてこのようにいろいろな変化球があり得るんだというニュアンスを提起した場合、日本が果たしてどう応えるか。日本の世論はこの問題でものすごく沸騰するでしょう。イデオロギー的にも「右」から「左」まであるし、国内政治的にも一種のコンセンサスができていないですね。「ソ連は誰が指導者になっても変わらない」「ソ連は脅威だ」と言って、ソ連と四つに組もうとしなかったツケが、急に回ってこようとしているわけです。その意味でも、これからでも遅くない、まさに真剣に対応すべきだと思います。

なぜならば、北方領土問題を解決せずに、日ソ関係が悪いままでもいいというなら別だけれども、北方領土問題を解決し、日ソ関係も改善したいという立場に立つ限り、このまま時を過ごすと、日本よりもソ連にとって有利になるからです。

正々堂々とソ連に当たれ

一昨年の秋、モスクワで開かれた第四回日ソ円卓会議のときに、私が日本側の学者を代表してスピーチをしたあ

講談社現代新書　定価＝四八〇円
韓国ヴェンチャー・キャピタリズム
渡辺利夫

と、ソ連側からサハリン州の知事が出てきて、スピーチを始めました。北方領土はサハリン州に属しているわけですが、「日本が主張する北方領土で、第二次大戦後生まれて育った人たちが、サハリンも含めて六十万人いる。彼らにとってはここが祖国なのだ」と言うわけです。ソ連は既成事実をつくることにたけている国ですが、実際にそういう人たちが育ってきている。

二十一世紀まであと十四年を残すだけ。日本としては何としても今世紀中に解決しなければならない。二十一世紀になってからでは、前世紀の、しかも一九四五年に終結した第二次大戦後の問題である領土問題について、「もう一度日本と話し合って返しましょう」なんていうことを、ソ連は絶対に言うはずがないからです。

国内政治でも経石の力を

つまり、日本にとっては日ソ関係はいまや時間との闘いという側面もあるわけです。

その場合に、オール・オア・ナッシングで、日本の国論が一致して「ソ連はけしからん」と言い続け、二十一世紀を迎えて結果的に領土が帰ってこないほうがいいのか。それとも、日本は無謀な戦争をして負けたわけですから、敗戦という冷厳な現実を直視した上でよりよい道を選択したほうがいいのか。いまその岐路に立たされていると思います。

私は、日本の二十一世紀に向けてのシナリオ、あるいは生存の戦略から考えると、ソ連がいろいろな変化球を投げてきた場合、その変化球に応ずべきだと思います。オール・オア・ナッシングでは、いつまでたっても解決できないわけですから。

たとえば、二島返還に応じて、あとの二島（国後、択捉）については領有権だけを主張し続けるという方法もあるし、あとの二島については共同利用とか共同開発という考え方もある。同時に、二百カイリで悩んでいる日本の漁業問題その他を解決する。

さらにここは一つの大きなポイントだけれども、ソ連はひょっとするとウラジオストクを対外開放するかもしれない。そういうニュアンスをゴルバチョフはウラジオストク演説で言っているわけです。

そして、日本との経済協力を強化したいとソ連が言っている半面、日本は平和国家、経済国家として今後もかなり繁栄していくと思いますし、いまの円高問題も、日本経済は数年後には日本の経済的活力のなかにこれを吸収していくと思いますから、そういう自信を持って、正々堂々と対ソ外交に臨むことが必要だと思います。

軽武装の経済繁栄を

これはアメリカに対しても言えることだけれども、ソ連が日本の経済外交を学びたいというなら、単に商人国家としての日本の経済を学ぶだけでなく、日本は軽武装で軍事力のコストが少ないわけですから、「ソ連も、経済を活性化しようと思ったら、日本のように軍事力を減らしなさい」ということを胸を張って言い得るような、そういう全体的な日本の将来像の中に北方領土問題の解決策を含む日ソ関係を位置づけていくべきではないかと思います。

そう考えると、北方領土問題では、たとえある種の妥協に応じても、それは決して日本の敗北でも屈辱でもない。むしろ活路が開かれるのではないかという気がします。

ですから、いまはいろいろな外交シナリオを書かなければいけないし、そのための世論づくりとコンセンサスづくりが必要になってきていて、時間は意外に待ったなしに迫ってきていると思います。

ゴルバチョフの果敢な挑戦は、単に「不気味」だけではすまされない問題を含みますから、日本は積極的にそれに対応していく中で、その不気味さをもっと違った意味に転換していくことが可能なのであって、この点でこそ日本の「対ソ外交」での主体性を保持すべきだと思います。

第二十四回野間児童文芸賞発表

財団法人野間奉公会主催の第二十四回「野間児童文芸賞」は、九月二十九日（月）午後五時から紀尾井町「福田家」でひらかれた選考委員会で、佐藤さとる・鳥越信・滝川道夫・福田清人・藤田圭雄・松谷みよ子・与田準一の七氏選考委員によって、次のように決定いたしました。

■野間児童文芸賞（賞牌及び副賞百万円）　末吉　暁子
ママの黄色い子象（講談社）

■野間児童文芸推奨作品賞（賞牌及び副賞三十万円）　今村　葦子
ふたつの家のちえ子（評論社）

贈呈式は、十一月四日（火）午後五時より丸の内「パレスホテル」で行われました。

財団法人　野間奉公会

●受賞者略歴

末吉暁子（すえよしあきこ）
43歳。児童図書の編集者を経て、創作活動に入る。「星に帰った少女」で、日本児童文学者協会および日本児童文芸家協会の新人賞、「だっくんあそぼうよ」でサンケイ児童出版文化賞を受賞。

今村葦子（いまむらあしこ）
39歳。フリーのコピーライター。武蔵野美術短大卒。受賞作品が初めての出版。